

SNSを使用した日韓遠隔交流会実践報告

— 韓国人日本語学習者にもたらされた作用について —

及川ひろ絵*

oikawah@hanmail.net

福島みのり**

insa-dong@sz.tokoha-u.ac.jp

目次

1. はじめに	4. 学習者の変化及び分析結果
2. 先行研究	4.1. 学習者の属性
3. 遠隔交流会の概要及び調査方法	4.2. 学習者の変化-言語面
3.1. 遠隔交流会の概要	4.3. 学習者の変化-日本に対する意識
3.2. 遠隔交流会の実践内容	5. アンケートから見えてきた課題
3.3. 調査方法	5.1. 客観的項目での回答
	5.2. 自由コメントでの回答
	6. 考察及び今後の課題

Key word : 원격교류회(Remote Exchange Meeting), SNS(Social Network Service), 실천(Action), 한국인일본어학습자(Korean-Japanese Language-Learners), 변화(Changes)

1. はじめに

インターネットの普及により国の枠を飛び越え、どこの誰とでも気軽にコミュニケーションを取れるようになって久しい現在、教育現場でもインターネットによる国際交流が多く行われている。中でも最近ではSNSを使っ

* 弘益大学 教養語学部 助教授, 日本語担当

** 常葉大学 外国語学部 グローバルコミュニケーション学科, 准教授

た遠隔交流が盛んである。

このような状況の中で本稿の目的は、SNSを使用した日韓遠隔交流の実践報告を行うことにある。さて、本稿で取り扱う両大学には共通点がある。第一、大都市に位置しておらず、地方で第二外国語を学習している。第二、地域社会の中で学習言語を使用する機会が限られており、教室以外で使用することはほぼない。よって学習者は、学習目標言語を用いたコミュニケーションの実践力を身につけ、モチベーションを維持することが困難という状況にある。ゆえに遠隔交流会はまたとない機会であることは確かであるが、本稿の事例は異種類の講義下で行われた遠隔交流であり、二つの教室の学習目標、カリキュラムは全くもって異なっていた。また日韓の間には学期の始まりに約1ヶ月の差があるため、物理的な制約といったものも重なり、交流回数も最小限に限られていた。

本稿は、このような状況下で模索しつつ行ってきた内容を整理し、様々な制約下でどのような手立てを講じたのか、ということに関する実践報告である。また学習者にどのような変化が表れたのかということも併せて報告することで、実践を通じた成果と課題を考察する。中でも学習目標言語との接触機会が日本人韓国語学習者に比べると少ない弘益大学世宗キャンパス教養外国語学部¹⁾で学ぶ韓国人日本語学習者に焦点を当てることで、その成果と課題がより明らかにされるであろう。これらの作業を通し、好条件が揃っていなくとも実施可能な遠隔交流のケース・スタディの一つとして具体的提案を行うことに研究の意義を見出したい。

2. 先行研究

日本語教育現場での遠隔交流の形式を問うならば、海外の日本語学習者

-
- 1) 教養科目である外国語講義の増加により、語学教育の専門機関として独立させる形でソウル及び世宗の両キャンパスに2007年に設置された。学生達はそれぞれの専攻学部にも所属しながら、教養外国語学部で第2外国語を卒業の必須条件として受講しなければならない。

と日本にいる日本語母語話者とのオンライン交流の形式が最も一般的方法として考えられよう。これに関する代表的な研究として大塚他(2008)は、日韓の高校間で行われたティーム・ティーチングによる遠隔授業、大塚他(2012)では遠隔チューターを参加させた作文授業の実践など様々な形態の遠隔日本語教育を行った。

二国間交流のみではなく、遠隔交流はその広がりを見せ、森山他(2010)では、世界7つの大学とオンライン授業の成果について整理した。労他(2010)でも韓国、中国、スウェーデンの日本語非母語話者の学びを支える実践としての交流を行った。これら実践を通し接触場面における日本語使用、コミュニケーションの方法、ストラテジーの方法など様々な側面から研究が行われてきた。

一方、日韓における交流学习研究の代表的なものとして澤邊(2007)が高校での文通交流を通して学習者の意欲を高める可能性について示したり、澤邊(2010)では交流学习の意味について質的研究を行った。その他、齊藤他(2013)や神野他(2013)の日韓協定校間でのスカイプを使用した日本語授業の事例報告が挙げられる。また、澤邊他(2018)では、教師同士がSNS上交流学习実践コミュニティを形成し、学習者が交流学习を活発に行うための土台作りを目指し、その成果について報告した。

学習者の動機づけという面で有効な遠隔交流はこのようにその内容や方法において様々な広がりを見せているが、遠隔教育・交流のための方法はいまだ十分な研究が進んでいるとは言えない、というのが共通認識である。

本稿で取り扱うSNSによる遠隔交流は、遠隔授業やスカイプを通じて教室を繋ぎ学習者の交流を促すという方法と異なり、極少数で構成されたメンバーによる交流である。ある意味では閉鎖的コミュニティ内だからこそ、より親しみを感じさせる交流方法である。距離に関係なくより容易に人々が繋がるSNSコミュニティ内において、その形態や内容と方法、また学習者がそこにどのような意義を見出すかなどの実践報告は、今後ますます必要になってくる研究テーマである。SNSというツールを通じて日韓という場面、異種類の講義、1年半という期間にわたる実践報告は管

見の限り見当たらない。本報告を通し、SNSツールを使用した言語学習の環境整備に向け、一つのケース・スタディとしてその具体例の提示を試みたい。

3. 遠隔交流会の概要及び調査方法

3.1. 遠隔交流会の概要

本稿の遠隔交流会の流れを報告する前に、両大学の講義概要について述べておきたい。日本側は語学系科目ではなく、韓国社会全般に関する知識を読解教材を通して得るために設けられた第1期・第3期の「韓国研究A」及び第2期の「韓国研究B」である²⁾。韓国側は動詞の活用を学び、身近な話題については日本語でコミュニケーション可能な学習者が受講する全学年対象の教養科目である第1期・第2期の「中級日本語1」及び第3期の「中級日本語2」である。

第1期から第3期まで両大学の講義時間がほぼ同時間に行われた為、SNSを通した交流だけでなく、講義時間内³⁾にオンラインで会話することが可能であった。遠隔交流会の参加人数及び期間は<表1>の通りである。

-
- 2) 韓国社会の様々な場面(文化、習慣、教育、女性)に関する文章を読み、読解力とともに韓国社会に関する知識を身につける。グローバルコミュニケーション学科韓国語専攻の専攻科目であり、受講者は全員大学3年生、韓国語能力は基本的な日常会話はこなせるレベルであり、本稿で取り扱った韓国人日本語学習者と同程度、もしくはそれ以上のレベルであると想定された。受講生のうち半数以上は韓国短期語学研修(3週間)を経験済み。
 - 3) それぞれ学期中の毎週木曜日、常葉大学は15時から16時30分まで、弘益大学は15時から17時までが講義時間であったため、講義時間内に2回、1回につき30分程度、Facebookメッセージャーを使用し交流会を行った。PC、スマート・フォンからも容易にアクセス可能、且つ、投稿毎にコメントができ、学生の利用率も高く、使いやすいツールであることからFacebookを使用することにした。

＜表1＞ 遠隔交流会の参加人数及び期間

	第1期 2017年9月下旬—12月初旬	第2期 2018年3月下旬—6月初旬	第3期 2018年9月下旬—12月初旬
日本 常葉大学	講義名：韓国研究B 参加人数：14名(全員女子 学生)	講義名：韓国研究A 参加人数：15名(全員女子 学生)	講義名：韓国研究B 参加人数：14名(全員女子 学生)
韓国 弘益大学	講義名：中級日本語1 参加人数：11名(うち男子 学生2名)	講義名：中級日本語1 参加人数：13名(うち男子 学生2名)	講義名：中級日本語2 参加人数：12名(うち男子 学生3名)

また、遠隔交流会の全体的な流れは＜表2＞の通りである。

＜表2＞ 遠隔交流会の流れ

	内 容	参加者
交流会前	学期休暇中にオフラインで会議。内容はトピック、スケジュールの確認など。	教員
	1)事前アンケート 2)グループ分け 5グループ 常葉大学(2名～3名)+弘益大学(2名～3名)=1グループ 3)Facebook非公開グループの設定及びSNSのマナーについて説明 4)自己紹介動画(1人当たり1分程度)をグループごとに編集し、1つの動画にしてFacebookにアップ。自分と同じグループの相手国の動画を視聴し、Facebookにコメントを書く。 5)交流会で質問したい内容を1人あたり2,3個考え、教員に提出→教員は収集し、誤用のチェック及び質問項目を分類し、1つにまとめ学習者に配布。(交流会での質問に困らないため)	学習者 教員
交流会1	第1期、2期のテーマは自己紹介・趣味など / 第3期のテーマは自己紹介・大学生活 交流時はFacebookのfacetime(ビデオ通話機能)を使用	学習者
交流会後	第1期は交流会事後アンケートのみ 第2期、3期はアンケートに加え交流時間中に課したミッション・シートも提出	学習者
交流会2	第1期、2期のテーマは大学生活(事前準備は大学生活に関する動画をFacebookにアップ) 時間・方法は自己紹介動画と同じ。 第3期のテーマは互いに関心を持っている社会問題について 交流時はFacebookのfacetime(ビデオ通話機能)を使用	学習者
交流会後	第1期は交流会事後アンケートのみ 第2期、3期はアンケートに加え交流時間中に課したミッション・シートも提出	学習者
学期終了後	学習者の中の希望者を募り交流会についての感想などを自由に語ってもらう会を持つ	学習者 教員
	交流授業を振り返り、評価・反省点・改善点の共有。	教員

3.2. 遠隔交流会の概要

参加学生は基本的な日本語での意思疎通が可能であった。そこで自己紹介動画の作成、交流会は日本語で行うことを基本とし、ミッション・シートや事後アンケートの作成など短時間で自分の考えをまとめるということに関して困難を感じる時のみ、韓国語の使用を許可した。3学期間の実践の中で、参加学生の反応やコメント、担当教師同士の意見交換の中でその内容は少しずつ変化していった。以下は、その内容と変遷である。

<自己紹介動画に関して>

交流会を始めるにあたり「自己紹介」は欠かせないトピックである。形式、内容は概ね自由であるが、名前・年齢(学年)・専攻・出身地・趣味・訪日経験の有無、日本でしたいことは何か・日本語を勉強している理由・日本に関して興味のある分野などについて日本語で話し、動画の最後に韓国語で内容確認のための質問を1つ言って終わるようにした。これは、日本語でアップした動画の内容を理解してもらえているということを実感させ、日本側にはネイティブの韓国語を聞くという機会を提供することを通し、会話のきっかけを掴ませるために行った。自己紹介動画の持ち時間は1人当たり1分から1分半、グループごとに1つの動画として編集し、Facebookにアップさせた。第3期は「自己紹介」の内容に加え、「大学生生活の紹介」も取り入れながら動画を作成させた。これは学習者個人の生活や考えに注目したものであり、個人的なトピックをオープンさせることで、短時間で信頼できる人間関係を築かせるという効果を狙ったことであった。

<ミッション・シートに関して>

第1期はミッション・シートの使用はせず、自由に会話をしてもらっていたが、「テーマから外れて雑談に終わってしまった」「何を話していいのかわからなかった」というコメントがあり、第2期目から使用することにした。ミッション・シートでは相手の名前・専攻などの基本情報、テーマが「大学生活」であったことから、相手の大学生活を把握するための核となるいくつかの質問を共通質問⁴⁾として行い、その後、準備してきた質問を自由に行ってもらうようにした。

事後アンケートから、ミッション・シートの作成を通して、テーマから外れず、会話を促すことに成功したということが確認された。手順としては、交流時は会話をしながら相手の情報をメモし、交流後はグループのメンバーにそれぞれ記入したシートを見せ合って足りない部分を書き込み、グループで1枚のミッション・シートを提出させるという協働作業を行わせた。これらの作業を通して交流時の自分のパフォーマンスを振り返ることに繋がった、という効果が得られた。

<事前に質問を準備することに関して>

各自、前もって質問を2,3個考え、担当教員が文法など誤用がないかチェックし、他の学生が考えた質問も合わせて質問を分類し、配布した⁵⁾。このように事前準備を行った理由は以下の4点からである。第一、関係のない突発的な質問を避けることができる。第二、時間の無駄なく会話を続けられる。第三、日本語で会話をすることが不慣れな学生も安心して交流会に臨める。第四、交流会を単なる雑談に終わらせず、テーマに合わせて話を進めることができる。

また、大きな質問から具体的な質問に入るような流れが望ましいこと、挨拶や相手が言ったことに関しての感想、相槌なども忘れずに会話を進めることが円滑なコミュニケーションに繋がる、ということを交流前ガイドンスで示した。

<第3期の社会的テーマに関する交流会について>

日本側の講義カリキュラム目標に「韓国の社会事情に関するテキストを読み、知識を身につけディスカッションを行う」という項目があり、韓国側には「中級からさらに上級の表現を身につけさせる」という項目があるため、担当教員の間で「社会的テーマ」に関するものを取り扱ってはどうか、これ

-
- 4) 「大学生活に満足していますか」「大学生活で楽しいこと・大変なことは何ですか」「サークル活動をしているならどんな活動ですか」「アルバイトをしているならどんなアルバイトですか」「将来どんな仕事をしたいですか」「どうしてその仕事をしたいですか、その仕事をするために何か努力していることがあったら教えてください」の質問を行った。
- 5) 質問内容は大学生活の勉学面・生活面に関するもの、サークル・余暇・趣味、アルバイト、日本への留学のアドバイスなどが見られた。

こそが双方のカリキュラム目標に合わせた交流会の理想型なのではという意見交換がされ、社会的テーマに関する交流会実施に至った。まず、グループごとに1つずつ関心のある社会的テーマを挙げてもらうことにしたが、その際、相手を刺激するような政治的思想や歴史問題に関する 이슈は避けることとし、なるべくならば両国に共通した社会問題を取り上げてもらうよう促した⁶⁾。似通ったテーマを取り上げたグループも見られ、テーマに共通性のあるグループ同士を交流させるのはどうかという意見もあったが、グループごとに不公平が生じてしまうのではないかと懸念もあり、調整せず1回目の交流と同グループで交流させることにした。

具体的作業としては、第1段階としてFacebookに母国語でテーマに関する新聞及びネット新聞の記事をグループごとに1つアップ、その記事に関する要約及び意見に関してはメンバー各自がそれぞれ、母国語でアップした。第2段階は、事前学習シートの作成を行ったが、その内容として相手国チームの記事及びその要約・意見を読んだ上でそれに対する自らの意見や質問を事前に目標言語で書き、担当教員は交流会前に誤文などがいないかチェックした。意見交換を行える状態にするため、この時点で考えられる限りのことは行った。

<成績評価について>

成績評価は両大学共に全体の5%に設定した。成績基準としては以下の3点である。第一、期限までにFacebookに動画をアップしかどうか。第二、期限までにコメントを書いたかどうか。第三、グループのメンバーと互いに協力して、積極的に会話に参加したかどうか。これに第2期目からはミッション・シートの書き込みはどうかを加えた。

3.3. 調査方法

遠隔交流会の成果と課題を明らかにするために、各期間の交流前後に紙

6) 韓国側はグループごとに1:「大衆文化」、2:「ブラック企業」、3:「若者の就職難」、4:「女性問題」、5:「日本の中の韓流」/日本側はグループごとに1:「英語教育」、2:「大衆文化」、3:「女性問題」、4:「高齢化社会」、5:「SNSのマナー」

媒体によるアンケート調査及び交流会での参与観察を行った。アンケート調査は講義時間を利用し、担当教員の立会いの下で行い、より公正な回答を得るため無記名とした。回収率は100%であった。

調査項目は学生の交流前後の言語四技能の変化、及び相手国へのイメージの変化、交流会全体に関する評価・感想を明らかにするために交流前後に分け以下の項目で行った。交流会前のアンケート項目は以下5点である。

1. 現在の言語四技能の自己評価	2. 希望する言語4技能の自己評価
3. 訪日経験の有無	4. 日本人の友人がいるかどうか
5. 日本・日本人についてのイメージ(6段階評価と自由記述)	

交流会後のアンケート項目は以下4点である。

1. 交流会に関する選択式質問(時間、楽しかったか、よく話せたか、日本人学生の韓国語はどうだったか)	
2. 交流会の感想・改善点	3. 現在の言語四技能に関する自己評価
4. 日本・日本人についてのイメージ(6段階評価と自由記述)	

4. 学習者の変化及び分析結果

4.1. 学習者の属性

アンケート調査と授業中の参与観察を通して明らかになった学習者の特徴を以下に示す。まず、学習者の日本語レベルを具体的に示したい。「中級日本語1・2」⁷⁾の受講者の前提条件として、動詞の様々な活用を学び、身近な話題については日本語でコミュニケーションが可能な学習者が受講するレベルであり、2018年度2学期時点の世宗キャンパスでは最も高難度レベルとして開講されていた。よって、教養日本語科目⁸⁾を受講したことのあ

7) CEFRの基準で基礎段階の言語使用者A2(身近で日常的な事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる)とB1(身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる)のどちらか、もしくはその中間程度に値する学習者が対象である。

8) 初めて日本語を学ぶ学習者対象の「教養日本語I」、数値が高くなるほどレベルが上が

る学習者は3期合わせて全体の⁹⁾90.9%であり、1年以上受講したことは全体の78.3%、平均受講期間は3.6学期であった。また、訪日経験のある学生は全体の88.8%に達し、中でも4回以上経験がある学生は30.5%であった。日本語を学んでいる理由に関しては自由記述で複数回答をしてもらったが、第1位は「日本文化に興味があるから」で全体の63.8%、第2位は「日本で就職したいから」で27.7%、第3位は「日本語が面白いから」で25%であった。

上記の結果から学習者は各自の主専攻¹⁰⁾があるにも関わらず、日本語を学習することに関して長期間の間、多大なるエネルギーを注いでいることがわかった。実際に日本に何度も足を運んでみたり、韓国国内の就職難事情の反映からか、日本での就職を考えている学生も3割近くにも上っていた。にもかかわらず、日本人と実際に話したことがない、日本人の友人がいない—ここで言う友人とは個人的なことを話せたりする相手のことを示している—と回答した者は全体の72.2%にも上っていた¹¹⁾。以上のことから、遠隔交流会は学習者にとって相当なる動機付けとなることが予想されよう。

4.2. 学習者の変化- 言語面

ここでは1期、2期、3期と期間ごとに分けて自己評価による遠隔交流会実

る。「教養日本語2」→「教養日本語3」これに付随する形として「初級日本語会話」「初級日本語購読」「映像日本語」がある。「教養日本語3」まで受講すると普通形、可能形、授受表現などを学んだことになる。

- 9) 3期合計した遠隔交流会参加者数は36名である。以下%はその内の何名が該当するの
かで算出したものである。
- 10) 3期合計した専攻を見ると、デジタル・メディアデザイン(8名)、アニメーション(5名)、コ
ミュニケーション・デザイン(4名)、ゲーム・グラフィックデザイン(4名)、コミュニケー
ション・デザイン(4名)、国際経営(2名)、グローバル経営(2名)、会計学(2名)、金融学(2
名)、バイオ化学(2名)、プロダクト・デザイン(1名)の36名であり専攻は多岐に渡っている
が特にデザイン系が多かった。
- 11) 講義中のやり取りで「友達がいる」とわかった学習者にどこで出会ったのか、と聞いて
みたところ、日韓交流アプリHelloTalkを通して出会った、と回答したものが数名
いた。学習者らは言語学習の場を得る為に自ら望んでSNSを通じ気軽に人と繋がって
いるようである。

施前の日本語能力と希望するレベル、及び実施後の日本語能力に関して具体的数値で示す。これらの作業によって、期間ごとに学習者にどのような変化があったのか把握されうるのであろう。自己評価を行う際に参考にしたレベルの例示は筆者らが独自に作成したものを提示¹²⁾、該当するレベルにチェックを入れてもらった。図1は第1期の交流会前後の日本語能力と希望するレベルに関する平均値を表したものであり、同様の項目で図2は第2期、図3は第3期の平均値を表し、各図の下にそれぞれポイントとなる解説を入れた。

＜図1＞ 第1期遠隔交流会実施前後の日本語能力(自己評価)と希望するレベル	＜図2＞ 第2期遠隔交流会実施前後の日本語能力(自己評価)と希望するレベル	＜図3＞ 第3期遠隔交流会実施前後の日本語能力(自己評価)と希望するレベル
<p>①希望する4技能のレベル ⇒ 概ね同程度。 ②交流会実施後、「書く」以外は若干レベルが上がった。</p> <p>*「読む(+0.3)」「聞く(+0.2)」「話す(+0.2)」「書く(-0.2)」</p>	<p>①希望する4技能のレベル⇒「読み(5)」「書き(4.9)」よりも「聞く(5.1)」「話す(5.3)」の力を伸ばしたい。</p> <p>②「書く」以外は若干レベルが上がった。</p> <p>*「読む(+0.2)」「聞く(+0.7)」「話す(+0.2)」「書く(-0.2)」</p>	<p>①希望する4技能のレベル⇒「読む(5.5)」「書く(5.4)」よりも「聞く(5.8)」「話す(5.6)」の力を伸ばしたい。</p> <p>②「聞く(+0.1)」のみ若干レベルが上がった。</p> <p>*「読む(±0)」「書く(-0.7)」「話す(-0.7)」</p>

また、それぞれの学期末に、「日本語の実力がアップしたかどうか」とい

- 12) 4技能それぞれ別に点数をつけてもらった。「話す」「聞く」はいずれも6点「日本で暮らす日本人と同じ」、5点「日本で生活ができる」、4点「自分が伝えたいことに関して話したり、同程度の内容を聞いて理解することができる」、3点「生活に最低限の表現ならできる」、2点「挨拶程度」、1点「できない」である。「読む」「書く」はいずれも6点「日本で暮らす日本人と同じ。新聞が理解できる」、5点「日本で生活できる。生活に必要な漢字ならある程度わかる」、4点「自分が伝えたいことに関する内容を書いたり、同程度の内容を読んで理解できる」、3点「生活に最低限必要な表現なら読んだり書いたりできる」、2点「ひらがな・カタカナがわかる」、1点「できない」である。

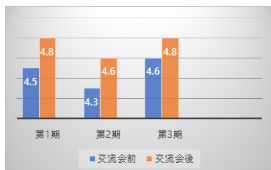
う項目で別途アンケートを取った¹³⁾が、第1期の11名6名は「少しアップした」、**「アップした」**(3名)、**「かなりアップした」**(1名)、**「どちらとも言えない」**(1名)と回答した。第2期は13名中6名が「少しアップした」、**「アップした」**(6名)、**「かなりアップした」**(1名)で参加者全員がレベルアップしたと回答した。第3期も12名中3名が「少しアップした」、**「アップした」**(7名)、**「かなりアップした」**(2名)と回答しており、3期合わせてほぼ参加者全員の自信に繋がった形となった。

一方、<図1><図2><図3>に見るように4技能のレベルに関して第1期・第2期とも「話す」は若干ながらもレベルアップが共通して見られた項目であったが、第3期のみ「話す(-0.7)」とポイントが下がっており、その他の項目に関して「聞く(+0.1)」以外レベルアップは見られなかった。それにもかかわらず、第3期の学期末アンケートで参加者全員がレベルアップを感じたという結果に至ったのは、「社会的テーマ」は難しいテーマではあったが、それに取り組みやり切った自分への肯定的評価、または充実感の表れではないか、と考えられる。

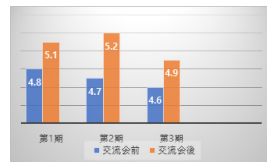
4.3. 学習者の変化-日本に対する意識

ここでは第1期から第3期に渡る交流会前後の日本・日本人に対するイメージの平均値の変化、及び、日本・日本人に対するイメージに関する自由記述の変化について示したい。

<図4>日本に対するイメージ交流会前後の変化



<図5>日本人に対するイメージ交流会前後の変化



13) 「1. 実力が下がった 2. 全く変化がない 3. どちらとも言えない 4. 少しアップした 5. アップした 6. かなりアップした」のうち一つを選択。

<図4>から全期間に渡って微々たる変化ではあるが、日本に対するイメージ¹⁴⁾が交流会後に良くなったことがわかる。これは実際に交流したという経験がプラスに作用した結果だと言えよう。<図5>の日本人に対するイメージ¹⁵⁾に関しても同様のことが言える。日本に対するイメージよりも日本人に対するイメージの方が若干平均値が高いのは、日本という国に対してはやはり歴史・政治問題などがあり、プラスのイメージを抱きにくい、国家の問題と人としての関わり方は別々に捉えていることを表していると考えられる。

次は自由記述に関する内容の変化である。交流会前に日本・日本人のイメージに関し以下の方法で複数回答ありで自由記述¹⁶⁾してもらった。

韓国語で書いてもいいです。

日本は()

)国だと思う。

日本人は()

)人々だと思う。

なお、以下の表中の記述は韓国語で書かれていたものは日本語に、日本語で書かれていたもので誤文は修正し、表したものである。

<表3> 交流会前の日本についてのイメージ

1期	綺麗な(3名)／旅行に行きたい(2名)／アニメ・マンガ(2名)／伝統を大切にする／平和な／知りたい／近くて遠い／閉鎖的な／すし・ラーメンがおいしい
2期	綺麗な(2名)／旅行に行くのにいい／おもしろい／鮮やかな／アニメが有名な／おいしい食べ物が多い／コンビニが便利／近くて遠い／安全な／先進国の／島国の
3期	綺麗な(2名)／旅行に行くのにいい(2名)／伝統を大切にする(2名)／茶道が有名な／おいしい食べ物が多い／完成度が高い／技術力のある／いい

14) 「1.とても悪い 2.悪い 3.少し悪い 4.少しいい 5.いい 6.とてもいい」の中から1つ選んでもらい、平均値を算出した。日本・日本人に対するイメージ調査の代表的な研究である斎藤(2004)は韓国人日本語学習者と日本語学習との関係を取り上げ、5段階評価で「1.とてもよい 2.よい 3.特に他の国の人と変わらない 4. 悪い 5.かなり悪い」として調査を行ったが、本稿では中間点が取れずより正確な解答を導き出すことができるのではないかと、という判断から6段階を用いた。

15) 「1.とても嫌い 2. 嫌い 3.少し嫌い 4.少し好き 5.好き 6.とても好き」の中から1つ選んでもらい、平均値を算出した。

16) 呉(2008)の日本語学習者の日本人イメージに関する研究においても文章完成法で「日本人は()」という文の空欄に回答者のイメージを自由に記述する形を取っていたが、本稿もこれに倣った。

第1期から第3期まで日本に対するイメージの中で最も多かったキーワードは「綺麗な」である。これは多くの外国人が抱く日本へのイメージと合致したものであるが、それだけでなく「旅行に行くのにいい」という回答も全期に渡って見られた回答であった。

〈表4〉 交会前の日本人についてのイメージ

1期	親切な(2名)／配慮のある／色々知りたい／本音と建前が違う／可愛い／礼儀正しい
2期	親切な(4名)／礼儀正しい(2名)／個性的な／勤勉な／可愛い／団結力のある／公共ルールをよく守る
3期	親切な(3名)／礼儀正しい(3名)／いい／落ち着いた／おもしろい／余裕がある／可愛い

第1期から第3期まで日本人に対するイメージの中で最も多かったキーワードは「親切な」である。これも多くの外国人が抱く日本人へのイメージと合致したものであるが、それだけでなく「礼儀正しい」「可愛い」という回答も全期に渡って見られた。

交流会後には以下の方法で日本・日本人に対するイメージについて記入してもらった。

あなたは日本・日本人に対してどんなイメージを持っていますか。思い浮かぶことをできるだけ多く書いて下さい。韓国語で書いてもいいです。
日本
日本人

〈表5〉 交流会後の日本についてのイメージ

1期	知れば知るほどおもしろい／色々な面を持っている／私が住みたい国／綺麗で見る所が多く感覚的だ／伝統文化と新しい文化がよく調和されていて旅行に行くのに良い／交通の便はいいが交通費が高い／絵を描くのが上手い人が多い・芸術好きな人が多い
2期	綺麗な国で、時間厳守を重視する／韓国と似ているところが多い／韓国と異なった美容文化が発達している／色々なアイデアがある／就職したい／手が器用で可愛いものがたくさんある
3期	勤勉で配慮がある／文化が色々あっておもしろい／私が就職したい／小さくて可愛いものがたくさんある／伝統文化が色々残っていて好きだが、韓国との歴史問題があったただ好きだけと言えず悲しい／近年は高齢化が進んで若者がいない／治安がいい

交流前の自由記述の形式とは違い、思い浮かぶことをできるだけ多く、という注意書きを入れることで、より具体的コメントを抽出することに成功したように思われる。〈表5〉より交流前と比べるとイメージに広がりを持ったもの、また自らの要望を表すコメントが見取れる。全期に渡って共通したキーワードは「色々な」であろう。実際に交流し、多様な考え方に触れたことの表れであろう。それだけでなく、「就職したい」といった要望や具体的イメージとして「時間厳守」「美容文化の発達」「小さくて可愛いものが沢山ある」なども新たな回答として見られた。

〈表6〉 交流会後の日本人についてのイメージ

1期	韓国人と共通点が多い／特別なことはない／礼儀正しいだけでなく情もある／可愛くて自分を上手く表現する／リアクションがよくて謙虚だ／リアクションがすごくておもしろい／仲良くなりたい
2期	リアクションをする時、「え～」とよく言って可愛い／話をよく聞いてくれる／親切で謝罪をすることができる／他人に迷惑をかけないけど、自分の内側をあまり見せない／リアクションはオーバーだけど謙虚で誠実だ／礼儀正しいが、個人主義的な性向が強い／小さくて可愛い女性が多い／平凡だ
3期	おもしろくて個性のある人が多い／特に悪い感情も好きな感情もないけれど、女性の自尊心が高くなれば良いと思う／可愛いものが好きで、可愛い人が多い／ファッションが派手でかっこいい／きっちりしている／他人に対して配慮のある韓国人と似ている感じで、日本人と言っても何ら特別なことはない／相手の話をよく聞いてくれる人が多い／仲良くなれば最高だ

〈表6〉から全期に渡って共通したイメージは「可愛い」「リアクションがいい」「話をよく聞いてくれる」というキーワードである。これらは交流する前には見られなかったイメージであり、日本側の参加者全員が女子学生であったことが影響していると考えられる。また実際に交流することで自分達と特別変わったところはない人々だと実感したのであろう。「韓国人と似ている」「日本人と言っても何ら特別なことはない」「仲良くなりたい」などの回答も見られた。

5. アンケートから見えてきた課題

変化がある一方で、授業の進行の枠組みに関し、率直な意見が見受けられた。以下にその内容を示す。

5.1. 客観的項目での回答

〈表7〉 交流会の感想 まとめ

質問	第1期・2期・3期の 1回目交流 (100% : 36名)	第1期・2期の 2回目交流 (100% : 24名)	第3期の 2回目交流 (100% : 12名)
時間はどうだったか ¹⁷⁾ (ちょうど良かった) (少し短かった)	63.8% 19.4%	66.6% 33.3%	33.3% 33.3%
楽しかったか ¹⁸⁾ (とても楽しかった) (楽しかった)	63.8% 27.7%	66.6% 29.1%	16% 58.3%
日本人学生と話せたか ¹⁹⁾ (話せた) (少し話せた)	52.7% 19.4%	66.6% 12.5%	33.3% 41.6%
動画と交流会での日本人学生 の韓国語はどうだったか ²⁰⁾ (上手だった) (少し上手だった)	58.3% 22.2%	58.3% 25%	0% 25%

〈表7〉より交流会の時間面に関して第1期と2期においては6割以上が「ちょうど良かった」と回答している。第1期、2期の2回目には「少し短かった」と回答している者が1回目と比べると19.4%から33.3%へと増加している。これは交流の時間を楽しみ、もっと話したいという要求の表れだと見

17) 「①長かった ②少し長かった ③ちょうどよかった ④少し短かった ⑤ちょうど良かった」から一つ選択。

18) 「①楽しくなかった ②あまり楽しくなかった ③少し楽しかった ④楽しかった ⑤とても楽しかった」から一つ選択。

19) 「①話せなかった ②あまり話せなかった ③少し話せた ④話せた ⑤よく話せた」から一つ選択。

20) 「①上手じゃなかった ②あまり上手じゃなかった ③少し上手だった ④上手だった ⑤とても上手だった」から一つ選択。

てとれよう。交流会の楽しさに関しても6割以上が『とても楽しかった』と回答しており、その他3割近くも『楽しかった』と回答していることから学習者にとって非常に有益な時間であったことがわかる。また、日本人学生と話せたか、という問いに関して『話せた』と回答した者が、第1回目よりも第2回目の方が52.7%から66.6%に増加していることから、2回目交流の方がより満足した、という結果となっている。動画と交流会での日本人学習者の韓国語に関しても半数以上が『上手だった』と回答しており、コミュニケーションに支障きたすことなく、円滑に交流会が進められたことがわかる。

一方、第3期の2回目交流に関する評価は時間面で『ちょうど良かった』は33.3%、『話せた』は33.3%、『楽しかった』と回答した者は58.3%いるものの、第1期と2期は『とても楽しかった』と回答したものが6割以上であったことと比較すると『楽しさ』が半減してしまったことは否めない。また、相手の韓国語能力に関して『上手だった』は0%、『少し上手だった』は25%で、社会的テーマを取り扱ったことによりコミュニケーション面で困難を感じたことが見てとれる。

5.2. 自由コメントでの回答

ここでは、アンケートの自由コメントをもとに遠隔交流会の内容に関する考察を行う。第1期、第2期、第3期(1回目)の総コメント件数は112件、うち68件の60.7%が肯定的コメント、31件の27.6%が中間的コメント、13件の11.6%が否定的コメントであった。コメントを詳しく分析するために、KJ法により評価別にカテゴリー化したものを<表8><表9>に示す。

<表8> コメント分析① 肯定的評価

肯定的評価 68(100%)							
感情面 40(58.8%)				新しい 経験 12 (17.6%)	動機 付け 7 (10.2%)	新しい 情報 5 (7.3%)	その他 4 (5.8%)
楽しさ	自信	親しみ	驚き	いい機会だ	もっと	日本の新	方法の

16 (23.5%)	10 (14.7%)	9 (13.2%)	5 7.3%)	つた 初めての経験	できるようになりたい いい刺激になった	しい情報 を得た	良さ
本当に楽しかった あつという間に過ぎた	通じた	韓国人の学生と変わらない 実際に会いたい	日本人学生の韓国に対する知識の 豊富さに驚いた				

<表9> コメント分析② 中間的・否定的評価

中間的評価 31(100%)				否定的評価13 (100%)		
要望 22(70.9%)				日本人学生に対して 9(29.0%)	通信の 問題 11(84.6%)	不自然さ 2(15.3%)
時間/回数 場所 8(25.8%)	交流の 方法 7 (22.5%)	グルー プ 5 (16.1%)	テー マ 2 (6.4%)	私達ばかり日本語を使 った 韓国語を使うことに 自信を持って欲しい	インターネット 接続の 問題	話が途中で終 わる
1つの教室で すると声が聞 こえにくい 時間が短い もっと回数を 多くやりたい	ミッシ ョンシ ートが大 変 前もつ て質問 を考 えてお くべき	もつと 多くの 人と話 したい	もつと 色んな テー マで話 たい		聞こえづらい 途中で切れる	気まずかった

* <表8><表9>の最下段はともに母数が少ないため代表的な意見として表示した。

肯定的評価のコメントを見るとその半数以上は感情面に関するものであった。実際のコメントより「同世代の、それも趣味が同じ日本人の友達ができるととても嬉しいし、また時間がすぐに過ぎてしまうほど楽しい時間だった。」といった<楽しさ>を表すものや、「日本語で話す自信がなかったけど、交流会で日本語が通じるということがわかったので、これからはもっと安心して日本語で会話できると思う」といった<自信>につながるコ

メントが中でも多かった。その他、「日本の大学生も私達と変わらないと思った。みんながとても親切に色々と答えてくれたので一度会いに行きたい」といったコメントからは〈親しみ〉が感じ取られた。また、「先生以外と日本語を使ったことがなく、実際に同世代の日本人と話したことがなかったので、新鮮でとても楽しい経験だった」といった〈新しい経験〉に結びつくものも多く見られた。その他、「日本語が下手で質問するのが大変だったけど、次はもっとできるようになりたい。いい刺激になった」といった〈動機付け〉を表すものも見受けられた。これらは、日韓両国は国レベルでは歴史的・政治的背景からは理解し合うことが難しいと考えられがちだが、実際に交流し合うことで互いに信頼できる友になれるのではないかと感じさせるコメントであった。

中間的・否定的評価では要望、内容伝達的なものが多く見られた。例えば「もっと長く、回数も多く交流したい。1つの教室ですと話がごちゃごちゃになる」〈時間・回数・場所〉と言ったものや、「ミッション・シートなしで自由に会話したいと思うができるかわからない」「話のトピックがもっとあればよかった。前もって質問を考えておくべき」〈交流の方法〉がそれにあたる。中でも特徴的なのが、「私達ばかりが日本語で話して、日本のみんなは韓国語を使わなかった。上手に話せると思うのもっと自信を持って話して欲しい」と言った〈日本人学生に対して〉の要望と見られるコメントも期に関係なく一つの意見として見られた²¹⁾。これらは、交流会をいいものにしていきたいという考えの表れであり、双方の言語によるコミュニケーションの機会を貴重なものと捉え、日本語学習へのさらなる動機付けへと繋がっているコメントだと考えられる。

次に第3期(2回目)の自由コメントについて考察したい。総コメント件数48件、うち18件の37.5%が肯定的コメント、17件の35.4%が中間的コメン

21) 同様の調査を日本人学習者にも行ったところ、これを裏付ける形で「韓国のみんなの日本語が上手で韓国語<日本語になってしまっていた気がする。今度のもっと韓国語で話したい」「驚く程、韓国の大学生は日本語が上手で、自分が韓国語で会話しなければいけないことを忘れてしまうくらいだった。むしろ自分が韓国語が出来なさ過ぎて恥ずかしかった」などのコメントが見られた。

ト、13件の27%が否定的コメントであった。詳しく分析するために、KJ法により評価別にカテゴリー化したものを<表10><表11>に示す。

<表10> 第3期(2回目)交流会のコメント分析① 肯定的評価

肯定的評価 18(100%)					
やりがい 5(27. 7%)	貴重な経験 5(27.7%)	動機付け 3(16.6%)	協働の経験 2(11.1%)	自らのレベルの把握 2(11.1%)	互いの国への関心 1(5.5%)
同世代と互いに理解し合うことができていると感じた 難しいテーマをやりとげた	いい経験をした	機会があったらまたやりたい	グループで一緒に協力できた	難しいテーマだったので自らの日本語の実力を把握する機会になった	互いの国について関心を持っているのがわかって嬉しかった

<表11> 第3期(2回目)交流会のコメント分析② 中間的・否定的評価

中間的評価17(100%)		否定的評価 13(100%)			
要望 12(70. 5%)		日本人学生に対して 5(29. 4%)	1回目の方が良かった 6(46. 1%)	実力不足 4(30.7%)	通信の問題 3(23%)
テーマの問題 8(47%)	時間の問題 4(23.5%)	前回と同じで韓国語を使わず、残念	1回目のほうが楽に話せて楽しかった	語彙や表現力が足りなく、実力不足で話が続き、残念だった	相手校の学生達が携帯を使用していたので、声があまり聞こえなかった
社会的なテーマより簡単なテーマで話したい 色々な社会的テーマで話してとても大変だった	もっと長い時間話したい				

* <表10><表11>の最下段はともに母数が少ないため代表的な意見として表示した。

第3期2回目は「社会的テーマ」を取り扱ったため、これまでとは異なったコメントが見られた。キーワードは<やりがい>である。「難しいテーマ

だったので会話は大変だったが、交流会のために知らない単語なども前もって辞書を引いて調べて準備をたくさんした。ある程度は相手の言葉を聞き取れて嬉しかったしやって良かったと思う。『同世代の人と社会的テーマについて互いにどう捉えているのかを話し、理解し合えたのはとてもいい経験。やってよかった』と言ったコメントはこれに当たる。また、それだけでなく『難しいテーマで話したので自らの日本語の実力がどの位なのか把握する機会になった』と言ったコメントからは＜自らのレベルの把握＞といった要素が読み取れる。これらは、学習者らが話し慣れているトピックでの交流からは得られなかったであろうコメントであり、徹底した事前準備、『社会的テーマ』に普段から触れ、ある程度の知識を持っているなどの条件が備われば、肯定的コメントへと繋がるものと考えられる。

一方で、中間的評価からはやはり＜テーマの問題＞が挙げられよう。『相手が知りたい韓国の○○など社会的テーマより話しやすいテーマで話した方が盛り上がるし、楽しいと思う』と言った意見はこれに当たる。また、第1期・第2期と同様、『前回と同じで韓国語をあまり使わず、残念だった』といった＜日本人学生に対して＞の要望が見られた。否定的評価からは『難しいテーマで話すことで語彙や表現が足りず、話も続かず実力不足を感じた』といった＜実力不足＞というコメントや『楽しい雰囲気で気軽に話せたので1回目のほうが楽しかった』といった＜1回目の方が良かった＞というコメントも見られた。これらのコメントは第3期2回目の遠隔交流会後の日本語能力レベルの過小評価、楽しさ・相手と話せたとかという点で満足度が極端に下がっていることと連動しており、全体的に見て学習者の自信喪失という結果を引き起こしてしまったことは否めない。

6. 考察及び今後の課題

本稿では、好条件が揃っていなくとも実現可能な遠隔交流会の一つのケース・スタディとしての実践報告を行った。ここではそれよって見えてきた成果と課題を挙げておきたい。

成果としては以下の5点が挙げられる。第一に、自らが考えた言葉で自らが話したい内容を学んだ言語で伝える、ということを通して外国語でコミュニケーションすることへの喜びを感じ、自信が持てるようになった点である。各期ごとに微々たる差があるものの、全期に渡ってほぼ全員が言語能力がアップしたと回答した。第二に、学習動機の高まりである。実際に交流することで自分の言語能力を振り返る機会となっただけでなく、そこで得られた新しい知識、また自他文化への知識や異文化に対応する態度の深まりなどが刺激となり、「もっとできるようになりたい」という動機づけに繋がった。第三に、リアルタイムで日本語を使って同世代の日本人学生と繋がることができる。「リアルタイムで繋がる」ことを通し、生きた日本語でコミュニケーションする機会が得られた。第四に、SNSを使用したことで交流会後、個人的に繋がることができる。第1期、第2期の学習者から日本旅行に行った際、交流した日本人学習者と直接会った、という話も聞いた。学習者の多くは長期間学んできているのにもかかわらず、日本の友人と呼べる存在がいなかった。今回の交流を通して互いに友人と呼べる存在になることができればこれに越したことはない。第五に、SNS上で繋がったことにより、より効果的な遠隔交流会を持た。短時間、しかも非常に限られた回数の交流会であったのにもかかわらず、参加者の満足度が高かったのは、交流会前の動画のアップとそれに対するコメント、交流会後のやり取りを通し、相手と繋がる喜びをより実感できたからである。

一方、課題としては以下の4点が挙げられる。第一に、テーマ設定の重要性である。話の展開がスムーズに行われ、交流することが「楽しい」と実感させるためにはテーマに関する認識が必須である。交流会の運営は、学習者主体であるため、自由で気楽な雰囲気の中で、コミュニケーションを実現させることが自信になり、ひいては学習動機を高めることにも繋がるからだ。ただ、「社会的テーマ」が意義のないものであったというわけではなく、円滑な交流の形として発展させていくためには、徹底した事前準備や、事後復習の機会などを設けて学習者の理解を促すことも必要であったと考えられる。そのためには、短時間、しかも回数に限られている場合、グループごとに同テーマで交流することが望ましい。第二に、日本人韓国

語学習の韓国語使用の少なさが挙げられよう。交流時は互いの目標言語で会話することを基本としていたが、それが守られず、自分達ばかり日本語を使用し、日本側の練習にはならなかったのではないか、という意見が期通して見られた。これに関しては学習者それぞれの姿勢により捉え方が変わってくるが、例えば日本語使用の時間、韓国語使用の時間と時間を区切って話すのも解決策の一つになり得るかもしれない。第三に、通信の問題である。安定したインターネット回線の使用、相手がPCならこちらもPC、相手が携帯ならこちらも携帯を使用、画像や音声が入り切ることのない環境整備が必要だ。第四に、時間・回数の問題である。時間に関しては「ちょうど良かった」と回答する者が多かったが、それでも3割程度は足りないと感じている。これら物理的な問題は担当教師間で調整、工夫することで改善できる余地があろう。

以上の成果及び課題は、言語教育の一つの実践の場として今後、さらに活用されるであろう遠隔交流会実施において重要な視点であると考えられる。課題への取り組みも含め、より効果的な実践を行っていくためにその方法を模索していきたい。

日韓は距離的にも言語・文化的にも互いに近い国でありながら、その歴史的経緯から今なお解決すべき問題が残っており、「近くて遠い国」だと言われている。しかし、それらの多くはマスメディアや自国中心主義の教育から形成されたイメージである。「遠隔交流会」は、未来を築いていく日韓の若者が互いに交流することで実際に触れ合い、自らの体験をもとに物事を主体的に捉え学び合える場なのである。これはアンケート結果の数々の声からも見てとれる結果であったことを最後に付け加えておきたい。

<参考文献>

- 及川ひろ絵、福島みのり(2018)「日韓遠隔交流会実践報告—韓国人日本語学習者の変化を通してみる交流方法の模索—」『第34回韓国日語教育学会国際学術大会予稿集』韓国日語教育学会 pp.52-54
- 呉正培(2008)「日本語学習者の日本人イメージにみられる特徴とその形成要因—韓国大学における学習者と非学習者の比較—」『世界の日本語教育』18 pp.35-55

- 川喜田二郎(1970)『続・発想法-KJ法の展開と応用』中公新書
- 澤邊裕子, 中川正臣, 岩井朝乃, 相澤由佳(2018)「教室と社会をつなげる交流実践コミュニティは何を目指すのかー外国語教育における<拡張型交流学習>の可能性ー」『日本語教育研究』第44号 pp.115-133
- 澤邊裕子(2010a)「韓日学校間交流学習に関する一考察」『韓国日本語学会第21回国際学術発表論文集』 pp.132-136
- 澤邊裕子(2010b)「韓国の日本語学習者と日本の韓国語学習者間における交流学習」『日本語教育』146号 pp.182-189
- 齊藤麻子, 大塚薫, 若月祥子, 林翠芳(2013)「Skypeを使ったアカデミック日本語授業の試みー日韓協定校の事例」『日本言語文化』第25号
- 松浦恵子(2013)「遠隔日本語交流会参加者の気づきと学びー対面での交流会との比較結果からー」『日本文化學報』第76号

접 수 일: 2019년 6월 28일

심사완료: 2019년 7월 28일

게재결정: 2019년 7월 30일

<Abstract>

Action Report for Korea-Japan Remote-Exchange Meeting using SNS

—Focus on the effects brought to Korean-Japanese-Language Learners—

The purpose of this paper is to present a detailed example of a remote-exchange meeting and to consider its results and issues in between Korean-Japanese-language learners who study Japanese language at a Korean university and students who major in Korean at a Japanese university. As a method of doing this, we conducted an optional questionnaire and a free-descriptive questionnaire to analyze what kind of changes appeared to the Korean-Japanese-language learner's language aspect and attitude toward Japan and Japanese.

As a result of the practice of the remote-exchange meeting, firstly, they have gained confidence communicating in Japanese language. Secondly, their learning motivation have increased. Thirdly, they were able to connect in real time with students in same generation. Fourthly, they were able to connect personally via SNS. Lastly, as a productive outcome, they could have more effective remote-exchange meeting by using SNS.

On the other hand, there were four issues to point out. Firstly, the importance of setting the right theme. Secondly, the lack of use in Korean language by Japanese-Korean-language learners during exchanges. Thirdly, technical difficulties. Fourthly, there were issues with its time and number of sessions for exchanges. Last but not least, they could confirm through these practices that remote-exchange meetings are great opportunities for the young people of Korean and Japanese who are building up the future together, can actually mingle and become independent based on their own experience and also utilize as learning place from one another.